

第一章

「ぐえ…麗人君」

スマートフォン画面の向こうで銀髪を刈り上げた彫刻のように美しい顔面を持つ男が返事をする。

「いづがえってぐるのお！」

『……、……？』

「あいだい！ もうだえられない！ あいだいい！」

『……、……？ ……？』

「分かった…、待ってるね…」

ぐずぐずと泣きながら通話を切った、黒髪ボブの25歳、江田環（えだ・たまき）はテーブルに突っ伏してオンオンと泣き続ける。

「寂しいよお！ 早く帰ってきて、れいどぐうん！」

太目の眉に重めの瞼、そばかすが散る童顔気味の平凡アラサーは、世界中で注目を浴びている天才画家であり、自分の彼氏である雲田麗人の写真に情けなく縋りついていた。

『ニューヨークでの個展も大成功だった、天才アーティストの雲田麗人氏。描いた作品は大変高額にも関わらず、すぐにソールドアウトする程の人気ぶりです。』

「麗人君……、今日も素敵。愛してる……」

「江田さん、いつまでもテレビにかじりついてないで仕事して？」

「はい!! 麗人君、私、頑張って稼いでくるからね! 愛してるよ!」

チュバツとテレビ画面に投げキッスをしてスーパールの品出しに向かう環に、

一緒に働く40代のシゴデキパート、岡崎祈里（おかざき・いのり）が「また妄想してる…」と顔を顰めてその後を追った。

「はぁ…麗人君、今日も素敵だね♡」

「画像に話しかけるのやめて。不気味だから」

「そんな！　じゃあ私は何にこの麗人君への溢れんばかりの愛を吐露すればいいんですか！」

「我慢すればいいでしょ」

「そんな…！」

仕事終わり、ロッカーで着替えながら環は祈里に猛然と抗議していた。

「麗人君のことを称賛したい！　続けていたいんです！」

「目がバキバキで怖いんだって…！」

至近距離で熱弁され、人妻なのにあまりにも美人過ぎるせいで横恋慕する客が絶えないダウナー系クールビューティーな祈里がキャラに似合わない悲鳴を上げる。

「雲田先生、あなたのどこが良かったのか……」

「ふふ！ 毎日愛のメッセージを送ってますから!!」

「怖すぎる……」

祈里が勢いよくロッカーの扉を閉めて環から距離をとる。

「……まあ、いつ振られるか分からないんだから、この世の春と思って今は謳歌した方がいいよ。振られたら慰めるくらいのはしてあげる」

「そんなはずありません！ 私の麗人君への海よりも深く、宇宙よりも広い愛が枯れることなんてありえません！ 私はずーっと何があっても麗人君のことが大好きです！」

「あなたが振られるって言ってんの。人の話聞いて？」

「もう、この子、ほんと疲れる」と言って、祈里はヨロヨロと歩いて帰っていく。

「お疲れさまでした！」

そんな祈里の背中に九十度の礼をした後、環も自転車に乗って自宅アパートへと帰った。午前9時から午後7時までの仕事で、給料は少なくとも、環一人で生活できるだけは貰えているし、何なら少しだけ貯金もできる。

「うへへ、金曜になったら麗人君に会える！ 楽しみだなあ」

個展の仕事で、2か月程麗人は海外に滞在していた。きっと日本食に飢えているはずだ。

「麗人君の好きな料理いっぱい作っとこう！」

日本への到着は午後だと聞いている。きっと夜に彼女である自分の家に来て

くれるはずだ。

「ああ、楽しみすぎるう！」

環はウキウキしながら、夜空に向かって吠える。

「愛してるよ、麗人君！」

環の声に应じてか、どこか遠くで「あおーん」という犬の鳴き声が聞こえた。

「ごながっただですっ!!」

「うわ、鼻水出てる…」

職場のスーパ－の休憩室で、環は顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。祈里は自分で作ってきた弁当を食べながらドン引きしていた。それでもティッシュを数枚引き抜き、環に手渡してくれる優しさはある。

「ありがとうございます!!」

チーンと鼻をかむ環を祈里が呆れ顔で眺めていた。

「ねえ…、もしかして江田さん、雲田麗人先生の噂知らないの？」

「なんですがぁ、ぞれ？」

環がコテンと首を傾げると、祈里が可哀そうなものでも見るような顔で口を開く。

「あの顔と身長189センチの長身、画家とは思えないくらいの引き締まった体に、実家も超資産家の大金持ち。滅多に笑顔を見せないクールでミステリアスな性格が容姿と相まって大人気で、女性との噂が絶えない色男」

「え…、じよ、女性との噂…？」

目を見開く環に祈里が質問を始める。

「雲田先生との出会いは？」

「友達と一緒に行ったバーです！」

「付き合ってたきっかけは？」

「麗人君の方から彼女になってほしいって言われました！」

「デートは？」

「一緒にいっぱいご飯食べます！」

「…付き合ってるの公表してる？」

「迷惑がかかるかもだから、内緒でって言われました！」

「はい、ダウト！」

「んな！」

祈里がビシッと指を環の鼻先に突きつける。

「な、何がダウトですか！」

「女遊びの一環です。諦めなさい。多分雲田先生は江田さんのこと、ただの飯

炊き女くらいにしか思っていない。寧ろそれ以下かも。なんか一回バーで酔っぱらって口説いただけで勘違いしてくる平凡ストーリーカー女だと思ってる」

「ひ、酷いです、祈里さん！」

環が泣き腫らした目を向けてくるが、祈里は鼻で笑い、そんな抗議を一蹴する。

「これ以上傷つかないように現実を教えてあげるの。この際はつきり言うけど、もう雲田先生、あなたの家には来ないと思うよ。新しい熱愛情報が出てから」

「え!？」

祈里が見せてくるスマホの画面を環が凝視する。

「天才画家雲田麗人の次のお相手は…美人で巨乳の料理研究家!? な、何ですか、これ！」

画面には男好きしそうな体の女が、麗人の腕に絡み付きながら歩いている写真が掲載されていた。

「だからあ、先週の金曜に日本に帰って来たんでしょ、雲田先生？　そして週末に女と遊び歩いて、本日、月曜日にこの記事。ってことは、江田さんの家にはいかにこの女に美味しいご飯作ってもらって、その体も美味しくいただいたってこと！　分かる？」

祈里がビシビシと環の額にデコピンを食らわせる。

「私が彼女なんですよ!？」

「だから、彼女じゃないってば！　ほんと諦めが悪い！　遊び相手ですらないの！　雲田先生から見たら、そこらへんの石ころと同じ存在なの！　そもそも、電話に出てくれたり、メッセージ返してくれるだけで奇跡と思うべき！　雲田先生の優しさに感謝しなさい、この勘違い娘!!」

「しょ、しよんなぁ…」

ぐいぐいと両頬を引っ張られて、環は情けなく眉を下げたのだった。

「ほんとだぁ…、いっぱい熱愛報道出てる…」

環はインターネットにこれでもかと転がっている雲田麗人の熱愛記事をベツドの上で読み漁っていた。

「うわ…すごい可愛い…。この人、有名なピアニストじゃない…？ この人は…最近人気のダンサー…。うわっ…、女優と映ってる写真もある」

環は今まで麗人のスキャンダルのことなど調べようと思っただけで、自分もなかつた。なぜなら「自分が彼女だから」。ほかの女の人と遊んでるなんてことは、想像もしていなかったのだ。だって、自分が彼女だから。

「…雲田麗人は…、巨乳な美人が大好き…って」

環は自分の平凡な顔と貧相な胸を思い、枕に顔を突っ込む。

「そんなあ！　だって、今度帰国する時はいっぱいおしゃれして出かけようねって言ったら分かったって言うてくれたのにい！」

半年前、麗人が仕事のために海外に旅立つ日、離れたくないと泣きじゃくる環に、麗人がそう約束してくれたのだ。麗人のスマホに入っていた写真に、ヨーロッパのおしゃれなカフェでコーヒールとクロワッサンを食べている麗人の写真があり、一緒にそんな朝ご飯を食べたいと言ったら、頷いてくれたのだ。

「まがが、彼女でもなんでもないなんて……！　うそだよねえ、れいどぐうん！」

環は目を潤ませながら、麗人へ通話をかける。けれど、麗人は電話に出てくれなかった。

「うおおん、れいどぐうん！」

麗人とのチャットに会いたいとメッセージを送っても既読にならない。

「うおおおん！」

顔から出せる体液全てを垂れ流しながら、環はベッドに突っ伏した。

「…嘘だよ、麗人君。私…彼女、だよ？」

麗人が忘れていったシャツを着せた、リスなのに、やけにデカイぬいぐるみを、環は強く抱きしめていた。

「え!? 彼女だと思ったの!? ワンナイトに決まってるじゃん！」

「ひいん!!」

週末の金曜日、環は友人である蓑原紫（みのはら・ゆかり）とともにおしゃれな居酒屋で食事をしていた。綺麗に巻いた栗色の長い髪に、ばさばさのまつげに何もしていないのに潤んで見える瞳。白い肌に服をこれでもかと押し上げ

る大きな胸と引き締まった腰。それになのに齒に衣着せぬ物言いをする気さくな紫は、全く男性経験のない環と違い、死ぬほどモテていた。

「え!? ま、まさか、環…、自分が雲田先生の彼女♡なんて痛い勘違いしてない…よね?」

「痛い女です、私は! 思いつきり私が彼女だと思ってました! ええ、認めます! 私は日本一痛い女です! 泣かせて!!」

目を見開く紫に愚痴を叫んだ後、環がグビグビとビールを飲んだでテーブルに突っ伏して泣き続ける。

「まあ、ドンマイ。雲田先生に会ったのって…一年前か? もしかして一年間、ずっと自分が彼女だと思ってた?」

「はいっ!! 元気にそう思って、毎日愛のメッセージを送っていました」

「うわぁ…」

「ひかないでえ！」

ぎゃんと吠える環に哀れみの視線を向けつつ、紫は頬杖をついて考える。

（…あの会員制のバーだね？ 流石の環もあの雲田先生の女性関係くらい知ってるかと思ってただけど…）

環が麗人と出会ったのは、エグゼクティヴが集う会員制バーだった。外資系銀行でバリバリに働いてる紫は、そこらへんのバーで飲んでいると、男がわらわらと寄ってきてナンパしてくるので、比較的静かに飲めるそのバーの会員になっていた。しかし、ここ一年程、海外での長期出張が入っていて、最近やっと帰国できたので、のでそのバーには行けていなかったし、高校からの友人でもある環にも会うことができないでいた。

（まさか…そんなことになっていたとは…）

目の前でめそめそ泣きながら出し巻き卵を頬張っている環は、とてもいい友

人だ。本人は何もかも平凡で何も取柄がないと言っているが、絶対にそんなことはない。少し低めの身長は童顔気味の顔と相まって可愛らしい。

なにより、目の前の生き物は紫の宝物なのだ。

——美人は得ゝ、なんてものは嘘だ。

小学生の時から、自分が可愛すぎるせいで女子からの嫉妬に晒され、男性からの下世話な視線を受けてきた。それは中学生になっても同じことだった。最初は仲良くしようとする女の子も、自分の好きな男がことごとく紫を好きになると、泣きわめいて「ビッチ」だのなんだの罵ってきた。それならまだいい方で、トイレに行っている時に、上からバケツで水を浴びせられたこともあった。びしょびしょに濡れた制服から、紫の下着がはつきりと見える。どうせ誰も助けてくれないと一人、トイレから出て教室へと向かう。女の好奇、男の欲

の視線が絡みついてくる。

（ああ…もう、消えてしまいたい）

——美しいのは私のせいじゃないのに。

「え!! す、すごい濡れてる…。そんなに暑い…? で、でも下着透けてるから!」

目の前に現れた変な生き物が自分のジャージを脱いで紫に着せてくれた。

「さ、流石に目に毒というか…いくら女の私でもドキドキするとか…」

「…バカなの、あんた?」

「え!」

確か最近隣のクラスに転校してきた子だった気がする。

「私のこと、知らないの?」

「え! もしかしてアイドル? そっか、そんなに可愛いならアイドルだよ

ね！ ご、ごめん、私、そういうの疎くて…！ グループ名とか教えてくれたらちゃんと見るから！」

「…アイドルじゃないし」

「え…？　じゃ、じゃあなんで私のこと知らないのとか言うの…？」

「っ！」

「いだい！」

まるで自意識過剰だと言われた気がして、紫は顔を真っ赤にして目の前の生き物の頭にチョップをお見舞いした。

「転校したてで知らないんだろうから教えてあげる！　ビッチで性格悪いから仲良くしない方がいい女なんだって、私は！」

「え!!　そうなの！」

「違うに決まってるでしょ、バカなの、あんた！」

「そんな…しょ、初対面なのに…」

イライラしてきて、紫はその場から歩き出す。なぜかその生き物も「そんなにバカじゃないけどなあ…成績はいいよ？ ほら、だってこの編入試験もパスしたし。結構偏差値高いでしょ？」だのどうでもいいことを話しながら横をついてくる。

「っ！　なんでついてくるの！」

「え！　い、いや、ジャージを貸せばあわよくば友達になってくれるんじゃないかと…。最近引っ越してきてこちら辺詳しくないんです。おしやれなお店とか教えてください」

「ほ、ほかの人に頼んでよ！」

「それが、なぜかクラスの子に嫌われてるんです！　何ですか!？」

「知る訳ないでしょ！　しつこいからでしょ！」

「しつこくしてないですよ！ 初対面の私にあれ買えこれ買えだの言ってくる人がいたので、生活が困窮してるのかと思って先生に相談したら、めっちゃくちゃ怒られたんですよ！ 靴とかも取っていくので、お金が足りないんだと思って、バイト案内のチラシと購買で買ったパンと牛乳を机の上に置いたらまた怒られました」

「カツアゲされてるじゃん！」

「ああ、あれが!! 漫画でしか見たことないですけど、ほんとにあるんですね。あ、いた！ おーーい！ この前のやつってカツアゲだったんですね！ ダメですよ、そんなことしたら！ 警察に捕まりますよ！ え、ちょ！ 聞いてます!? ねえ、どこ行くんですか！ ねえ！ カツアゲだめですよ！ あとタバコもダメです！ なんか知らないおじさんに金貰うとか言うのも多分ダメですよ！ あと、自分の胸とか容姿に自信がないから可愛い人に文句言うのも

ちよつと良くないです。胸とかはこれからも大きくなりますけど、歪んだ性格はなかなか治らないってばあちゃんが言っていました！ あとあなたが先輩に振られたのは、性格が悪いって評判だからって言っていましたよ！ ねえ、ちよつとー！」

「っ…は、あはは…あははは！」

好きな先輩をとられたと言って自分を虐めていた張本人が、謎の生き物に全てを暴露されて「そ、そんなこと言ってない！」と真っ青になっている。けれど、「え！　なんでそんな嘘を！」「大丈夫です！　自分で貧乏だって言うのが恥ずかしいなら、私にお金をせびっている証拠の音声はちゃんと取ってあります！　私と一緒にバイトして、脱貧乏ですよ！」「あの先輩、性格ブス大っ嫌いだそうです！」だの言われて半泣きになっている。

「あっはっはっは！」

なんて痛快なんだろう。

「ほんとバカみたい！」

何をうじうじしていたのだ、自分は。

こんな所で潰れたくない。もっともっと広い世界に出たい。あの生き物は淀んだ空気を一新してくれる風のようにだ。

「行くよ！」

「おわ！」

走り出した紫は思い込みが激しめの生き物の手を取り、一緒に走り出す。

「名前は？」

「環です！」

「いいよ、友達、なろう。」

「や、やったあ！」

その時の満面の笑みを紫は一緒忘れないと思った。

田舎の中学から、高校受験をして二人で都会に出た。大学に入り、外資に就職した紫と違い、環は総菜が死ぬほどうまいと評判のスーパーに正社員として就職した。曰く「美味しい総菜で日本を元気にしたい!」とのことだった。

アホっぽいのが、環らしいと思った。自分はそんな環を心から応援している。

（あの時から思い込みが激しくて、しつこかったけど……。まさか自分が雲田麗人の彼女だと思い込むなんて…）

あの男は絶対に無理だ。環と一緒にバーに行った日。あの男は環がいない時、最初に紫に声をかけてきた。これまでモテてきた紫でもクラッとするような色男。けれどその瞳はただただ冷え切っていたように見えた。だからワンナ

イトのお誘いを断ったのだ。その後、用事ができた紫はバーを後にしてしまった。「もう少し飲んでから帰る」といった環を、知り合いのバーの店長に頼んで、帰ってしまったのだ。

（一緒に連れて帰っていれば…）

——環がこんなに泣くこともなかった。

（私の責任か…）

とにかくバーの店長に、その時の話を聞かなければ話が分からない。

「環、店、変えるわよ」

「ぐえ？」

大して飲めもしないビールをやけ酒気味に流し込んでいた環の頬はすでに赤く染まっていた。

「ほら、行くわよ」

「ふあい」

（ここ、麗人君と出会った場所だ…）

紫に連れて来られたのは、一年前に彼氏…と勝手に環が勘違いしていたらしい男と出会った場所だった。

「ゆ、紫ちゃん、な、なんでここに？」

「どういう経緯で環が雲田先生のこと彼氏って勘違いしたのか、バーのマスターに聞かないと分かんないでしょ！」

「そ、そんなの私が説明するよ！」

「環の話、主観が入りすぎるからダメ」

「そんなあ…」

地下へと続く階段を下りていき、豪華な扉の入り口で会員証を見せて中に入

ると、暗めの照明とゆったりとした音楽、高そうなソファや観葉植物が並んだ高級バーが現われた。

「ほら、こっち」

「うん……」

初めて来た時と同じで、少し緊張しながら環は紫の後ろをついていく。

「マスター！」

「……お、紫ちゃんと、環ちゃんじゃないの。すっげえ久しぶり。会いたかったよ」

ひらひらと手を振って笑うのが、バーのマスターである白海（しろみ）だった。黒い髪をハーフアップにしたひげの生えた長身のイケメンで、店に来る女性からこれでもかと言いい寄られているが「酒が俺の全て」と全て断っているらしい。

「あなたねえ！」

「うお！　いきなり激怒!？」

紫がグイグイと白海に詰め寄る。

「あなたなら絶対大丈夫と思ったから、環をこの店に一人で置いていったのに、何で雲田麗人なんて男を近づけさせてんのよ！」

「え？　麗人？　なんでってそりゃあ……」

「環は猪突猛進で思い込みが激しいところがあるんだから、女遊びしまくってるような男に『彼女になってほしい』なんて適当に言われても信じるに決まってるでしょ！」

「え!?　信じるって何言って！」

「うう……」

白海が目を丸くしているのを見て、環は紫の話が真実だったのだと思い、唇

を噛みしめる。

「ふざけんなよ、このおっさん！」

「ひい！ ま、待って、ちょっと説明したい！ 落ち着いてよ、紫ちゃん！」

「落ち着いていられる訳ないでしょ！ あんな女の敵みたいな男を！」

「うげえ！」

紫と白海のやり取りはしばらく続きそうだった。環はしょぼくれながら黙って一人でカウンター席に座る。

（あ：一年前もここに座ったなあ）

目の前に紙ナプキンが置いてある。あの日、紫が用事で帰ると言った時、環も一緒に帰ろうとしたのだ。しかし、白海が出してくれた酒のつまみがついもなく美味しく、勤務先のスーパールの新しい総菜メニューのヒントになるのではと思い、話を聞くつもりだった。それに白海も初めてバーに来た環にとっても

親切で、こういう場所に慣れていなかった環も、楽しくお酒が飲めていた。

「……」

環は自分の鞆からペンを取り出し、紙ナプキンにリスのキャラクターを描いた。環が描くのが得意なわけにお腹が出ている変なリスを。

「れいど…ぐうん…」

横から腕が伸びてきて、スルリと環が持っていたボールペンが抜き取られる。そしてそのリスの横に、わけにうまいスイカの絵がスラスラと書き足された。

「ぐえ…ぐええん」

「何してるんスカ、こんなところで」

「麗人ぐううん！」

環は隣の席に長い足を押し込んで座ってきたそれはそれは美しい男に思いっきり抱き着いたのだった。

「れいどぐんっ！ れいどぐうん！」

「顔、ぐちゃぐちゃっスよ」

麗人は高級そうなブランドスーツのポケットから皺ひとつないハンカチを取り出すと、それで涙でぐちゃぐちゃになった環の顔を何のためらいもなく拭いた。

「はい、綺麗っス」

「あいがと」

「ん」

麗人は乱れてしまっている環の前髪を綺麗に整えた後、環の前になんの飲み

物もないことに気付く。

「飲んでないのに、なんで酔っぱらってるんスか？」

「んう♡」

麗人がメニュー表を片手に持って開きながら、もう片方の手でこしょこしょ♡と環の顎をくすぐる。

「ん…ん…♡ま、前の店で飲んできたの…っ」

顎を上げてくすぐったいのを我慢している環の唇に、麗人がちゅう♡と吸い付いた。

「ほんとだ。酒の味がする」

「ビール飲んだ！」

「そっか。飲めるようになったんスか？」

「うん！」

環がへらへらと笑い、麗人の太い腕にぎゅうつとしがみつく。

「えへへ、久しぶりに会ってもカッコいいね、麗人君。愛してるよ」

「俺も愛してます」

「えへへへ」

「こら、環！」

「きやあ！」

環は麗人の反対方向からグイッと腕を引つ張られて悲鳴を上げた。

「ゆ、紫ちゃん!? どうしたの？」

「どうしたもこうしたもない！ なあに思いつきり雲田先生の毒牙にかかって

んのよ！ あはは、雲田先生、お久しぶりです。その節はどうも」

紫が環の体を引き寄せた後、にっこりと笑って麗人に挨拶する。白海にマテ

イーニを頼んでいた麗人が何の感情も伺えない瞳を紫に向けた。

「…誰？」

「あはは」

紫は心の中で（こんのお、くそ画家が！）と罵りながらも、表面では笑顔を崩さず話し続ける。

「いやあ、一年前にこちらのお店でちよつとお話しただけですよ。ほら、環、そろそろ帰るよ！」

「え!? な、なんで!?　せっかく麗人君にも会えたんだから、ゆっくり…」

「麗人君とか言わないの！　あのねえ、日本に帰ってきてるのに、環の家には来ずに、こんなお店で飲んでるのが答えでしょ！」

「それは…」

「いい加減にして！　遊ばれてるっていい加減に自覚しなさいよ！」

「っ……！」

ビクッと環の体が震える。傷ついた顔をしている環に気付き、紫が我に返って口を開きかけるが、そのまま唇を噛み、視線を逸らしてしまう。二人の間に気まずい沈黙が流れた。

「ほ、ほら、二人とも、まずは何か飲んで……、ね？」

白海がへらりと笑いながら間に入ろうとするが、キッと紫に睨まれ、すごすごと引き下がる。

「……帰るよ、環」

紫が環の手を掴んで引っ張ろうとするが、環の体は動かない。

「っ環！ いい加減にして！」

「い、嫌だよ、紫ちゃん。私、帰らないよ」

紫が顔を顰めて舌打ちした。

「駄々こねないで！ 一年前、一人でお店に残すんじゃないかった！」

「わ、私は紫ちゃんの子供じゃないよ！ れ、恋愛のことまで言われる筋合いはない！」

「っっ、勝手にして！」

「あ…」

紫は顔を真っ赤にしながら店を出て行ってしまふ。それを追いかけてようとする環が、後ろにいる麗人を振り返った。麗人は楽しそうに口角を上げながら、頬杖をついていた。

「俺を置いていくんスカ？」

「っ…！」

「いいっスよ。あの美人の子、追いかけても」

「や…やだ…」

環がそう言うと、麗人の眉が少しだけ上がる。

「じゃあ……誰の隣にいるべきか……分かりますよね？」

環は俯いたまま麗人の隣の席へと腰を下ろす。

「……いい子」

麗人が目を細めて笑った。

（私……何してるんだろう）

環は麗人が頼んでくれた名前も分からないおしゃれなカクテルを飲みながら、ぼーっと隣にいる麗人を見つめていた。紫と別れてから、麗人は環をつけて、店の奥にあるソファ席に移った。二人きりなのかと思ったが、その席には入れ代わり立ち代わり色んな男女がやってくるのだ。麗人に絵を描いてほしい企業の重役や資産家、麗人を色っぽい目で見つめる女たち、そして友人と思わ

れる顔立ちの良い男たち。麗人は環を隣に置きながらも、ずっとそういう人たちと会話をしていた。時折、「おかわりは？」とか「なんか食べたいっすか？」と質問されるものの、環は居心地が悪くて仕方がない。

「あ♡麗人さん♡」

すると、テレビで見たことのあるとんでもなく可愛いアイドルが大きく手を振って席までやって来た。そして何の確認もなしに環とは反対側の麗人の隣に座ってしまう。

女は環などいないかのように麗人だけに話しかけ続ける。

「ねえ、これから時間あるでしょ？ 二人っきりになりたあい♡」

アイドルの女は、スリスリ♡と麗人の胸板に頬ずりし、可愛い顔と豊満な体を使って全力で麗人にアピールしている。ベタベタ触れても、麗人は何も言わず、そのアイドルの好きにさせていた。

環はその場に勢いよく立ち上がる。

「…どうしたんスカ？ 座って？」

麗人の声に、環は緩く首を横に振った。

「何、嫉妬スカ？ 大丈夫、俺の一番は…」

麗人が環の手に触れようとするが、それを環が払いのける。麗人の眉間に皺が寄った。

「ねえ、ちょっとそんなに怒らないで…」

「今までありがとうございます！」

環はその場で勢いよく頭を下げた。麗人は手を伸ばしたままで固まっている。

「紫ちゃんの言う通りでした！ 大人のワンナイトの作法、分かってなくて本当にごめんなさい！ 連絡先も消しますし、もう電話もメッセージも送りませ

ん」

「……」

麗人は無言で環を見る。環は顔を上げてにっこりと笑った。

「私の我儘に付き合ってくれてありがとう！　優しい麗人君が大好きでした！
これからも創作活動、心から応援しております！」

環は財布から自分が飲んだ以上の金額の万札を抜き取り、テーブルに置いて、店を後にしようとする。入り口まで来たところで、強く手を掴まれた。

「ちょっと……！」

「離して!!」

「っ！」

環が髪をなびかせ振り返る。眉をキリッと上げながら、ボロボロと涙を流す環に、麗人は目を見開いて、動きを止めた。

「私、彼女を大事にしない天才画家より、彼女を心から愛してくれるニートの方がいいです！ 私が稼ぐから、収入なんてどうでもいいもん！ さよなら！」

環はそのまま走って階段を上り、夜の街へ駆け出した。

「……なんの用？」

「ごめんなさい、紫ちゃん」

「…今更」

「ごめんね、それだけ言いに来たの。いつも私のことを思ってくれてありがとう。私が間違ってた。紫ちゃんは何も悪くないの。それだけ。私を許さなくていい。だからもう泣かないで」

「っ…ごめ…ごめん。酷いこと言った…っ!!」

「そんなことないよ」

環はその足で紫の自宅アパートへ向かった。そして腫れぼったい目が出てきた紫に深々と頭を下げたのだ。紫は目にうつすら涙を浮かべながら環を部屋に入れてくれた。

そして、紫の部屋で二人、温かいコーヒーを飲みながら、環は麗人と別れてきたことを紫に伝えたのだった。

「そっか……。でも、環は好きだったんでしょ？ ごめん」

「ううん、いいの！ 仕事先の人にも絶対いつか振られるって言われてたし！ まあ、振ったのは私の方なだけど！」

へらつと笑う環に、紫が唇を噛んだ。

「…あんな男のことで、環が傷つく必要なんかない」

「えへへ……。でも…結構優しかったんだよ？ 海外に行ったら、必ず色んなお

土産買ってきてくれたし！」

「へえ、…安いハンカチとか？」

「ハンカチ？ 違うよ、えっとねえ…時計とか！」

「……………時計？」

「うん！ 私は、腕時計しないから家にしまっただけだね！」

「……………その写真とかある？」

紫はなんだか胸騒ぎがしてきた。

「あ、あるよ！ 麗人君にお礼の写真送った時にちよつとつけたんだ！」

環がスマホを操作し、腕時計が映った写真を紫に見せる。紫は真っ青になつて卒倒しかけた。

（ス、スイスの高級時計メーカー…！）

「あとねえ…ちよつとヒールが高い靴とか！ 仕事でヒール禁止だからあんま

り履けてないんだけどね」

「……写真は？」

「これ！」

（私もお金貯めて買いたい有名ハイブランド……！）

「あとねえ……香水とか、鞆とか？」

「写真！」

「え？ こ、これだけ……」

（鞆がめっちゃ高のラグジュアリーブランド……！）

「ちょ、ちょ、ちょっと待て、環！」

「ん？」

紫が環の肩を両手で掴んで詰め寄る。

「そ、その……多分、絶対ないけど……、もしかして、雲田先生のおうちに行っ

たことある？」

「え？ 何言ってるの？」

「あはは！ そうだよね！ まさかあの雲田麗人の家に入れる訳……」

「日本に帰ってる時は、いつともそこから出勤するように言われてるよ？」

紫は背中からその場に倒れ込んだ。

「ゆ、紫ちゃん、どうしたの!? またさっきのバーに行こうだなんて！」

「いいから！ あんたが雲田先生の連絡先消しちゃったから連絡しようがないでしょ！ とにかく早く！」

「私と麗人君は別れたんだってば！ あっちも勘違いストーカーがやつと離れてくれて喜んでるんだって！ さっきもアイドルの子とイチャイチャしてたし！」

「アイドルって…」

紫が心当たりのあるアイドルの名前を上げると、環が頷いた。

「それ！ 確か今度の個展のスポンサー企業の社長の娘！ 無下にできないんだって！」

「そ、そうなの!？」

「いいから！ とにかくまだバーにしていることを願うしかない！ 早く！」

紫に背中を押されて環は先ほど出てきたお店の扉の前まで連れて来られる。

「ほら！」

「で、でも紫ちゃんも麗人君はやめろってさっき…」

「それはちゃんと話聞いてなかったから！ ほら、早く開けて…！」

環がバーの扉を開こうとするが、鍵がかかっていることに気付く。

「え？ まだ十二時前だよね？ こ、こんなに早く閉まる訳が…」

するとガチャガチャとせわしない音が聞こえた後、勢いよく扉が開いた。

「ほ、ほら、麗人！　もしかしたら環ちゃんが来てくれたのかも…」

すると店内からガシャンとグラスが割れる音が聞こえてくる。

「うわぁ！　す、すいませんね、今日はもう閉店で…っ！」

店内の方を向いていた白海が振り返り、目の前にいる環を見下ろす。

「あ、あの…」

目を見開き固まっていた白海がガバツと環の小柄な体を持ち上げた。

「ひゃあ！」

そしてそのまま全速力で店の中を進み、先ほど環が座っていたソファ席までやってくる。

「あ…え？」

そこには先ほどとは違い、ネクタイを外し、高級スーツを着崩してソファの

背もたれに力なく沈み込む麗人の姿があった。

「頼む、環ちゃん！ 何とかして！」

「ひゃあ！」

そして環はそのまま麗人の膝の上に乗せられてしまった。

「お、俺と紫ちゃんは買い物行ってくるから！ ごゆっくり！」

「あ、ちょ！」

白海は紫の背中を押して店から出て行く。そして外から施錠される音がした。

「……麗人…君？」

環が小さな声で呼ぶと、麗人の顔がゆっくりと起き上がった。

「…なんでいるんスか？」

「んと……」

そう言えばなんで自分がここに連れて来られたか聞いていなかった環が口ごもる。すると、麗人が煩わしそうに手をヒラヒラと振る。

「帰ってくださいよ。もう別れるんですよ」

「麗人君……」

「デリカシーのない天才画家は嫌なんスよね？ 分かりました。もう分かりましたから」

「麗人君……っ」

「もう分かりましたって……。分かったから……。もう……。行つて……」
「っ！」

最後の語尾が震えたのに気付いた環は、麗人の顔を両手で掴み、唇を尖らせるだけの子供のようなキスを麗人にお見舞いした。

「っん!？」

最初、見開かれていた麗人の目がだんだんトロリと溶けていき、力なく垂れ下がっていた両手は環の腰に優しく添えられる。

「んっ！ んっ！ んっ！ んっ！」

「ん…ふ…ん…ん…ふ」

何度も角度を変えて、ぶちゅ♡ぶちゅ♡と押し付けられる環の唇を、麗人は目を閉じながら受け入れ、時折、ちゅ♡と吸い上げたり、舌でチロチロと舐めたりする。

「んっ…なんで、金曜日に帰って来たのに…っん♡来てくれなかったのお…っ♡」

「ん…ふ…あ♡…帰ってくる日は、今週の…ん♡金曜日って伝えたはずっスよ…♡でも…嘘、つくの…ん♡良くなかったっスね？ 仕事が…入ってて…ん♡♡ふぁ…それ、終わらせてから…環さんと…ゆっくり会いたくて…っ♡♡

だから、嘘つきました…ごめんなさいっ…んうう♡」

「ん！」

やっと環がキスをやめると、麗人は酩酊したような顔で自分の膝の上に乗る環を見上げていた。その顔がとんでもなく色っぽくて、可愛くて、環は胸がきゆう♡と痛んでしまう。

「あぐう！」

「ん…♡」

環は思わずはだけている麗人の首筋に噛みついてしまう。少しでも声を出した麗人は、環を止めるようなことはせず、喉を晒して環が噛みやすいようにしてくれた。

「あぐ…んぐ…あぐ…あぐう！」

「ん…ん…ふ…あ…んあ…♡」

気持ち良さそうな麗人の声に、環は体がビビッと反応してしまう。

（麗人君の可愛い声…もつと…もつと聞きたい…!）

衝動に支配された環は、麗人のスーツをせかせかと脱がしていく。シャツのボタンも全部外し、エイヤ!と一気に麗人の胸元を晒す。

「はう♡」

まるで彫刻のように美しい胸板と綺麗に割れた腹筋が現われて、環はうつとりと溜息を吐く。

（さ、触りたい…!）

「さ、触ってもいいですか…!」

環が鼻息荒く尋ねると、麗人は目を細め、自分の指を甘噛みしながら、ゆっくりと頷いてくれた。

「え、えっちい…!」

ゴクリと唾を飲み込んだ環は自分の両手で、麗人の腹筋をスリスリ♡と撫でる。

「はっ…ん…♡」

ピクリ♡と体を震わせた麗人が気持ち良さそうにぼっこりと浮き出た喉仏を晒す。あまり日焼けしていない白い体なのに、筋肉はしっかりと付いている麗人の艶めかしさに、環は鼻血が出そうだった。

(す…すごい…、こ、こんなエッチなこと…麗人君にして…許されるの、私…!?)

「……もう終わりっスか？」

「はえ!？」

手が止まってしまっていた環は、麗人にそう囁かれて、慌てて意識を自分の思考から麗人の体に戻す。

「…ここ、いない？」

「ひえ！」

麗人は自分のベルトをゆっくりと外し、ズボンのチャックを下した。環はハクハクと口を開け閉めしながら、その様子を凝視している。

「…欲しくないんスカ、これ？」

「あ…う…で、でも…そ、その、そういうのは…っひ！」

ゆさっ♡

「あう…うう…れ、麗人く…、だ、ダメ、そ、そんな、エッチな動きしたら、ダメだってえ…！」

ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡

「だ、だめだよ！ ゆさゆさだめ…っ！ 腰振ったらダメだよお！」

麗人は環の顔から視線を逸らさず、下からヘコヘコ♡と腰を振って、環の股

間を刺激してきていた。環が麗人の腹筋を両手で抑えて動くのをやめさせようとするが、全く歯が立たない。

「れ、麗人君…は、はれんちだつてばあ…！」

「破廉恥なの嫌いなんスカ？」

ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡ゆさっ♡

「ひ…いい…ん…んう♡れ、れいとく…っ、や、だめ…へ、変な気持ちになつてくる…からあ」

（麗人君のおちんちんが、ぐう♡って押し込まれてきて…、おまんこジンジンしてくる♡もっとやらしいこと、したくなっちゃう…！）

「ここ、お店だからあ…っ！」

環がいやいやと首を横に振るが、麗人は動きを止めない。

「白海が鍵をかけていったから大丈夫っスよ。ねえ…はあ……、エッチなこ

と、したくないの、俺と？」

「つううゝゝゝ、し、したいですう！」

腰を掴まれぐう♡と股間を押し当てられた環は、顔を両手で覆って白状した。

「じゃあしよ」

「だ、だめ！ え、エッチは…！」

「婚約してから…でしたね」

麗人が強く唇を尖らせる。

「そ、そうだよ！ それにその、私たち付き合ってもいなかった訳で…！」

「それ、誰の入れ知恵っスか？」

麗人が下着の中からぶるん♡と固く勃起して先走り濡れ濡れのデカちんぽを取り出す。そして、勝手に環のスカートの中にも手を入れて、パンツを器用

に脱がせてしまった。

「あ、れ、麗人君……！」

「いつものスリスリして……？」

「ひっ…♡」

麗人が環の体を抱き寄せて、耳元で甘く囁く。

「おちんちんとおまんこ、スリスリするやつ、してください」

「れ、れいとく……こ、こういうのは、その、彼女としないと……！」

「だから環さんに頼んでます。…お願い…してえ？」

「ひいゝっ♡わ、分かったあ♡」

ぷちゅぷちゅ♡と環の耳朶にキスをしてくる麗人にあつという間に負けてしまった環が、腰を前後に緩く動かし始める。

ぬちゅう♡…ぬちゅう♡…ぬちゅう♡…ぬちゅう♡…ぬちゅう♡

「ひい…いん…んう…うあ♡んう…んう…んう♡」

「くう…ん…たまき…さ…ん…、きもちい…っス…♡」

「はうう…か、可愛い♡も、もっとお顔見せてえ…！」

「ん♡これで…く…んう…いい…スか？」

環の首筋に顔を埋めていた麗人が体を離して、顔を見せてくれる。麗人が快感に喘ぐ姿は、どんな生き物よりも煽情的で、環は思わず腰を速めてしまう。

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ♡

「れいど…ぐん♡れいどぐん…れいどぐん…れいどぐん♡」

「はあ…んう…♡ん♡ん♡ん♡たまきさ…ん…、それ、きもちい…っ♡」

「かわいいよお…♡」

「ん…ふ…♡んう…は…あ…んうっ♡」

環が麗人のちんぽの先端にぐりぐり♡とまんこを押し付けてやると、ビクウ

♡と麗人の腰が跳ねた。麗人が環にぎゅうと抱き着き、荒い息を上げる。

「たまきさ…っ♡イキたい…っ♡イかせて…っ♡イかせて…ください…っ♡」

「はうう♡ちんちん、きもちい？ 気持ちいの…、麗人君…っ？」

「きもちい…きもちい…♡たまきさ…っ♡ちんちんの先っぽ、ぐりぐり、するの、上手…きもちい…っあ…♡イキたい…っ♡たまきさあん、イクイクさせてえ？」

「かわいいい…♡♡」

上目遣いで必死に強請ってくる麗人の可愛さにノックアウトされた環は、まん筋に麗人のちんぽを挟み込み、激しく腰を振りたくる。

ぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅ♡♡

「麗人君、イクイクしてえ？ イクイク♡イクイクって言ってえ♡」

「あうう♡イク♡イクイクしますっ♡…環さんのスリスリで、イクイク…し

ますっ…んぐう♡♡

「私も…イクう♡」

「あう♡」

ほぼ同時に二人は絶頂し、体液を吐き出す。

「んやあ…あ…きもちい…よお…麗人く…ん♡」

びゆるうううう♡ぶびゅう…ぶび…びゆるうう…♡♡

「は…あ…ぐう…環さっ…♡」

麗人は環のまん筋に大量のもったりドロドロザーメンを吐き出していく。環はそんな麗人の頭を優しく撫でながら、腰を緩く動かし続ける。

「はあ…はあ…ん♡」

「たまき…さ…♡」

麗人はスリスリ♡と環の胸元に擦り寄ったのだった。